



包茎男士は修行中

松明の炎が等間隔に置かれた真夜中の戦場で、二振り
の刀剣勇士は凌辱されていた。

太刀と槍、それぞれが妖魔と化した刀に体の自由を奪
われ、無理矢理に股をこじ開けられている。下半身の着
衣を剥ぎ取られ、禪の股下から勃起した魔羅を振じ込ま
れ、菊門に挿入されていた。

「んおっ!? こんの……うおっ、ふっざけんな畜生……ん
っ!? おっ!? あっ、ああ、や、止め……ああああがあああ
ああああああ!!」

太刀である同田貫正国は、尚も強く握った己の分身を
振り回そうと腕を振り落とそうとする。だが、複数の妖
魔は空気を震わせる呻き声を出して掴み掛り、それを許
さない。

同田貫の歯を剥き出した怒りの表情を肴にしては、耳
障りな笑い声を上げて魔羅を突き上げる。刀剣勇士と言

えどその姿形は普通の雄と何ら変わらない。それを良い
事に妖魔の凶暴な性欲は肉棒を介して膣内に侵入し、犯
す。

おぞましい程に激しく脈動する魔羅を膣内で感じなが
ら、しゃがれた喘ぎ声を上げる同田貫は屈辱と快感の狭
間で苦悶する。

己の力量不足で隊に迷惑を掛けた上、刀剣勇士として
この上ない恥辱を受けた。抵抗の雄叫びを轟かせ分身を
握る腕は勇ましく敢闘しようと息巻いているが、肉体は
膣内から響く快樂の鳴動に酔い始めている。

容赦なく種付けされて行く雄の膣に、汚れた白濁の激
流が注がれる。赤黒く波打つ襲を包む膜となつて感覚を
奪い、脱糞する様に水音と共に種汁を噴霧する。

肉の花が咲いた菊門の奥、雄の秘された性感帯を妖魔
の亀頭が擦れる度に魔羅が増長したように角度を持つて
勃起する。

無論、妖魔では無く、同田貫の魔羅が。

垢や埃で汚れきつた禪の中で、魔羅は狭苦しく身悶え、

浮き出た血管を誇示する様に前袋に押し付ける。玉袋を蹴り出して狸の様にぶらつかせると、顔を出す陰毛を生温い夜風に靡かせながら染みを広げる。

妖魔の種付けに合わせて腰がうねり、種汁が膣を満たすと雄叫びと共に勃起が加速する。禪の中で『龜頭』から己の種汁を堪える事無く垂れ流せば、染みは透明から白濁に変わり絡み付く水音を響かせる。

「ひあああつぐがああああつ!! てん、めえらあつ!! おおお俺をおつ!! た、種壺にするにすんなってなあ……、一万年早えんだよお糞があああああつ!!!」

膣の中に何度目かの種付けが行われると同時に、その勢いで吹き飛ばすように同田貫の四肢が振り回される。三白眼に殺意の籠った光が宿り、全身の筋肉が伸縮し瞬時の暴走に備える。

夜の戦場に轟く甲高い叫び声。鼓膜までも裂けそうな声を上げて同田貫は分身を振り翳した。逆手に持ち直した分身で周囲の妖魔を薙ぎ払い、一瞬の隙を突いて複数首を一気に斬り飛ばす。

膣から妖魔の魔羅が勢い良く抜けて、内腿を伝い種汁の滝が脛に向かって滴る。狼狽える妖魔の首を勢いに任せて払い斬る大立ち回りの中で力めば力むほど、奥底に注ぎ込まれた種汁が溢れ出す。

濃厚な雄臭さの代わりに、鼻につく血生臭さが充満する頃には、同田貫以外に動く者は見えなかった。血だまりの中から鼻息荒く駆け出すと、肌蹴た鎧と緩んだ禪もそのままに別の戦場へ向かう。

もう一人の刀剣男士が凌辱されているであろう戦場に向けて一直線に、禪の脇から立派な魔羅を激しく暴れさせながら。

「はあ……はあ……はあ……こんの淫乱が……つ!! お手杵えつ!! さつさとお前えも突き飛ばせつてのおつ!! 突くのが得意じゃねえのかよおおつ!!!」

妖魔に飛ばれているもう一振りの槍は、菊門どころか口にまで妖魔の魔羅を啞えさせられている。しつかり握った己の分身を地面に突き刺し体の均衡を保ちながらも、苦しそうな呻き声と共に妖魔の種汁を飲まされている。

「んーっんーっんぶうううーっ!!!ぐぼっぐぼっぐぼっぐぶおっ!!ゲホッゲホっ、うげええ……。はあーはあーはあーこ、こんにやろ!!いい、いい加減こんな気持ちいい……じゃなくて気持ち悪い事止めるっの!!」

そう叫ぶ御手杵の下半身は裸だった。種ごと破り取られて開かされた股には、分身と同じく暴力的に太く長い魔羅が垂れ下がっていた。前後の口に魔羅が挿じ込まれば反応する様に大きく弾み、『亀頭』が鍛え上げられた腹筋を叩き上げる。

「止める」と敵に命じられた所で止める輩では無い。この世の者とは思えない気味の悪い笑い声を上げて、妖

魔は連続で魔羅を突き上げる。

生前晴らせなかった悔いなのか、妖魔としての本能なのか、御手杵の大柄な体を雄臭く弄んでは雄欲に呑み込まれる様を楽しむ。

御手杵も人の形をした為した故、雄の性感帯は正常に活動している。菊門は湿り気を帯びて疼き、魔羅は硬度を増して先走りの糸を垂直に垂らす。

緩んだ菊門の奥に見える前立腺は更なる刺激を求め、意思とは無関係に高く尻を突き上げる。火を間近に当てられ燻されるような感覚が膣の奥に残り、更なる刺激を求めている。

恥辱の果てに溢れ出した腸液と妖魔の種汁が尻毛に絡み、泥の如き粘りで気泡を作る。菊門が魔羅を旨そうに啞える度に気泡は生まれ、尻毛は白濁に塗れて尻に吸い付く。

悔しさに染まった表情に頬が火照るも、唇を噛み締めてにじり寄る雄欲を毛嫌いする様に耐える。その感情が本心なのか、それとも背徳的な状況に己を陥れる秘され

た虚栄なのか、御手杵自身にも理解できない。

ただ唯一、菊門に魔羅を挿入され奥底で大量の種汁を受け容れると、甘い喘ぎ声と共に全身が震え魔羅の底から何かが競り上がる感覚に襲われるのは事実である。

上半身に残る緑の上着に向かって、四方から妖魔たちの魔羅が種汁を浴びせ掛ける。荒々しい呻き声が幾重にも鼓膜を揺さ振り、強烈な雄臭さが粘り気と共に頭髮に、目蓋に、唇に、首筋に絡む。

その瞬間、颯る妖魔たちの意識が御手杵から己の快感に移った。その瞬間を逃さなかった。

「あつ、あつ、あう、んああ……あうっ……お、お前ら。俺だつて、俺だつて三銘槍が一つなんだ……!!そんなに甘く……見てるんじゃない……ねえええええっ!!!」

地面に突き刺した分身を引き寄せる様に両腕で強く掴むと、周囲の妖魔を蹴り飛ばして距離を取る。

そして、槍をそのまま軸にし腕力と地面を蹴った惰性で勢い良く全身を回転させる。遠心力が働いた蹴りで近く妖魔を更に蹴散らし、最後に真上に飛躍し槍を引き

抜いた。

着地するや否や槍を上下左右縦横無尽に振り回し、針に糸を通すが如き正確さで慌てる妖魔たちの喉仏を砕き貫いていく。

骨を砕く重い音と共に妖魔は倒れて行き、同時に得物である刀は真つ二つに折れる。その上を踏み越えた御手杵は決して攻撃を止めず、時に突き刺した妖魔を投げ飛ばして視界を広げて行った。

下半身で節操なく暴れる魔羅の感覚も一々気にしていられない。己の記憶が確かなら、もう一振りの仲間が同じように凌辱されている筈だ。

方角は分かるが正確な場所は分からない。目の前の妖魔を文字通り突き飛ばして夜の闇の中を走る。

「おい、同田貫！同田貫いるか!?! いるなら返事してくれ!!俺は、御手杵はここにいろぞー!!」

槍を携えたまま道無き道を進む。己の足が蹴り捨てた砂利音だけが静寂を防ぎ、探し求める仲間の刀撃は未だに耳に入らない。

人魂の如く戦場を照らす松明の灯りが揺らめき、疾走するこちらの姿を嘲笑うような風切り音と共に不気味な存在感を放つ。汗が滲んだ肌を撫でる風は生温く、微かに血の臭いを運ぶ。

そして、不意に風が場違いな濃厚な雄臭さを鼻腔に届けた時だった。

「……この声……同田貫!? 同田貫無事か!! 俺はここに
いるぞ!!」

「うおらあああ……って、御手杵!? ったく何処ほつつき
歩いてんだよ!! どれだけ俺が探した……ああん? お前
何魔羅ブラつかせてんだよ!! 『俺には突くしか能が無え』
ってほざいて、敵に菊門突かれてんじゃねえっての!!」

「う、うるせえよ!! 突くって槍で突くことだからな!!
か、勘違いするなよ馬鹿狸!!」

見当違いの返答を叫ぶ御手杵だが、同田貫の姿を見て
驚きながらも強く言い返す。何だかんだで合流できた事
による安堵か、自然と動きも大きくなる。

「そ、そういうお前だつて禪から魔羅ブラブラさせてる

じゃないか!! 長さも太さも俺より小さい癖に掘られて
もそのまんまにしてるんじゃねえっての!! 狸の癖に玉
袋も小せえし!!」

「なつ、ななな何言いやがる!! デカいから良いって訳じ
やねえだろ!! 太すぎて俺以外殆ど掘れねえ癖によ!! 凶
体デケエ癖にウジウジ掘りやがって、待つてやるこつち
の身にもなつてみやがれ!!!」

「あ、ああつ!? なんだと!! だつ、だだだ大体お前の菊
門、尻毛が多すぎて挿れる時に巻き込まうから面倒
なんだよ!! 魔羅啞える時も陰毛多すぎて息し辛いし、質
実剛健ぶるならもう少し毛の処理しとけよ!!!」

「んだとおつゴラア!?」
「なつ、何だよやるのかよ!!!」

同田貫と御手杵は、魔羅を隠そうともせず真正面か
ら口喧嘩し始める。互いの床事情を躊躇なく暴露し、己
の不満を喧嘩腰で相手にぶつける。

雄同士で絡むなど、男色の嗜みがあれば隠す事も無い。
欲情する相手が容姿端麗な稚児でなく筋骨隆々な益荒男

である。それだけの違いである。

だが、それだとしても戦場、しかも闇夜の中で隙を見せるのは刀剣勇士としては愚かと言う他ない。口喧嘩は激しさを増し、闇夜の戦場に良く響く。

付近の叢の風下側から近付つく人影にも、太刀と槍の二振りには気付かない。終いには互いに顔面を真っ赤に紅潮させて、口にするのも憚れる淫乱な言葉の応酬を繰り広げている。

淫靡な内容に敏感に魔羅は反応する。鬼の角の様に一気に硬く勃起すると、己の雄力の強さを誇示する様に互いの魔羅に向けて『亀頭』を向ける。

互いの『亀頭』が様子を窺うように揺れ動き、二振りの口喧嘩もネタが無くなり黙り込んでしまった時。

叢の中から人影が飛び出した。

二振りにはそれを避ける暇すら無かった。

「おおおおおっ!! 同田貫に御手杵!! 漸く見つけたぞ!! どちらも無事であったか!? ……うむ、その様子じゃと心配は要らぬようだな。この山伏国広!! 一先ず安心して!! カーツカツカツカツカツカ!!」

驚き呆然としている同田貫と御手杵の前で仁王立ちをして高笑いを上げる刀剣勇士、太刀の山伏国広は満面の笑みを浮かべて二振りの方を力強く叩いた。

今回の戦場では二振りと共に出陣していたが、途中はぐれた二振りを探すために敵陣を掻き分けて突き進んだらしい。

事実、その証拠に全身には大小多くの切り傷が残っており、一部からは出血も確認できる。衣服や被っている頭巾も大きく切り裂かれ、青色の鮮やかな短髪が汗に塗れたまま風に揺れている。

白い歯を見せ付ける様に二振りに顔を近づけると、山伏は二振りと肩を組んで額を重ね合わせる。同田貫も御手杵も恥ずかしそうに顔を背けようとするが、力づくで顔を引き寄せる。